

## 概要

「V て V」という構造を持った文に関する形式意味論の研究では、「-て」による接続は連言的に分析されてきた (Matsui, 2009; Nakatani, 2003, 2013)。確かに、多くの場合には「V て V」の形式の文は連言的であるが、「歩いて5分かかる」などの「V て V」文は条件文的になる。この条件文の意味は英語の“and”による文の接続が条件文的になるという現象 (Culicover and Jackendoff, 1997) とは本質的に異なる。というのは、「ジョンが歌い、メアリーが踊った」のように「V て V」文から「て」を除いたゼロ連言文が持ち得ない条件文の意味が「て」の挿入によって生じるからである。実際、「??歩き, 5分かかる」は先の「V て V」文に比べて容認度が大きく下がる。本稿では、Nakatani(2013)による「V て V」文の分析を「-て」が時間順序を表すとする点は受け入れつつ、TP 付加規則を改めて定義することによって、「て」の挿入による条件文的な意味の導出を説明できるような「-て」接続の意味を提案する。

## 1. 問題提起

日本語で2つの節を接続する表現として「-て」がある。例えば(1)では、「ジョンが歌う」という節と「メアリーが踊る」という節が「-て」によって接続されている。本稿では Nakatani(2013) にならって、このような形式の文を「V て V」文、「V て V」文における「-て」による接続を「-て」接続と呼ぶことにする。

(1) ジョンが歌ってメアリーが踊った。

「V て V」文を扱った形式意味論の研究は少ないが、それらにおいて「V て V」文は明示的ないし暗示的に連言として分析されてきた (Matsui, 2009; Nakatani, 2003, 2013)。確かに、「V て V」文の多くは連言的な意味を持つ。実際、(1)と(2)は真理条件的に同じである。

(2) ジョンが歌い、かつメアリーが踊った。

しかし、「V て V」文は条件文的な意味を持つこともある。「V て V」文の一例である(3a)が連言的であるとすれば(3b)は真理条件的に(3a)と等しいはずであるが、そうはなっていない。むしろ(3a)の言い換えとしては(3c)の方が適切である。すなわち、(3a)は条件文的なのである。

(3) a. 駅から家まで歩いて5分かかる。                      c. 駅から家まで歩くと、5分かかる。  
b. 駅から家まで歩き、かつ5分かかる。

「-て」接続に関する先行研究では条件文的な接続を説明することができていない。本稿では、Nakatani(2013)による「-て」は時間の順序を表すという分析は受け入れつつ、「V て V」文の条件文的な意味も説明可能であるような「-て」接続の意味を提案する。次の節では Martin(1975)による「V て V」文の意味の分類を参照し、「V て V」文には連言的なものと条件文的なものが存在することを確認する。第3節は「V て V」文の意味の形式化を見る。まず Nakatani(2003, 2013)による先行研究を説明し、先行研究では「V て V」文の条件文的な意味が導出できないことを確認する。同節後半では Nakatani(2013)の形式化で条件文的な意味が導出されないのは TP 付加規則が連言的に定まっているためであることを示し、その上で条件文的意味も導出が可能な TP 付加規則を提案する。連言を表す表現が条件文的な意味を表す現象は他の言語でも観察され、先行研究が多く存在する。しかし、「V て V」文が条件文的意味を持つことは単に連言文が条件文的になるという現象とは異なるということを、第4節でゼロ連言との比較によって示す。さらに、その比較は提案した TP 付加規則を支持する証拠にもなることを見る。さらに本稿が提案する TP 付加規則を支持する現象として、その次の節では「-と」接続も「-て」接続と同様に連言の意味と条件文的意味の両方を持つことを確認する。そして最終節では結論を述べ、今後の展開として譲歩的条件文との関わりを見る。

## 2. 「V て V」文の用法の分類

(1) と (3a) を見ても分かるように、「V て V」文には複数の用法がある。それらの用法については日本語学において多くの記述的な研究がなされている。Martin(1975: 479)によれば、「V て V」文の意味は (4) の 9 つに分類される。例文は作例の明示がない限り Martin(1975) による。

- |  |   |
|--|---|
| <p>(4) a. Temporal sequence: “and, then”<br/>本を借りて読んだ。</p> <p>b. Consequence: “and so”<br/>雨が降って行けなかった。</p> <p>c. Manner or appearance: “-ing, -like”<br/>昼休みの 30 分を喋って過ごす。</p> <p>d. Contrast: “and/but”<br/>彼は学校を去って私は学校に留まった。</p> <p>e. Instrument: “by ...ing”<br/>気象情報を集めて天気図にする。</p> | <p>f. Witness or exemplification: “and in proof thereof”<br/>この部屋は実に暑くて、いつも 30 度以上ある。</p> <p>g. Simple conjoining: “and, ;”<br/>ジョンが歌って、メアリーが踊った。(作例)</p> <p>h. Condition: “if/when”</p> <p style="margin-left: 2em;">i. 歩いて 30 分くらいかかる。</p> <p style="margin-left: 2em;">ii. ジョンは愛を欠いて生きることができない。<br/>(作例)</p> <p>i. Concession: “and yet, even so”<br/>一昼夜寝ず書いて 5 枚もできない。</p> |
|--|---|

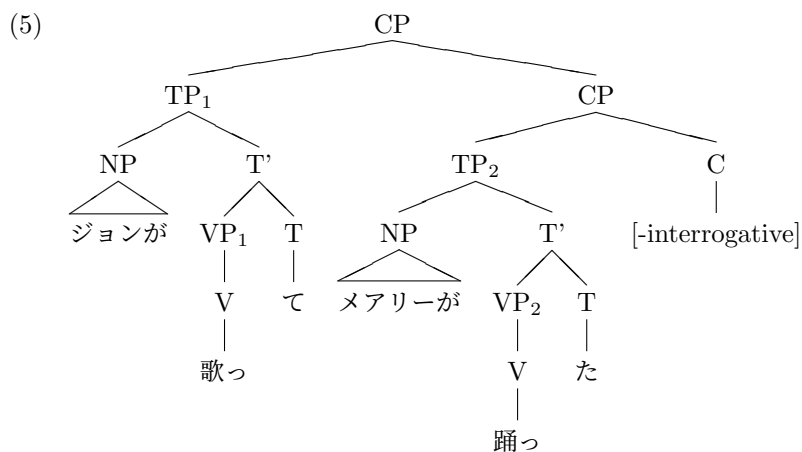
この分類では、(4a-g) は連言的、(4h-i) は条件文的である。(4) が唯一な分類ではなく、Hasegawa(1996) などとは異なる分類を行っている。しかし、どのような分類でも真理条件的な観点からは必ず連言か条件文になっている。したがって、「V て V」文は真理条件的には連言的ないし条件文的になると断定される。

## 3. 「V て V」文の形式的な意味論

### 3.1. Nakatani(2013) : 「-た」の異形態としての「-て」接続

Nakatani(2003, 2013) は、形態統語的な議論から「-て」は過去時制を表す TP 主要部「-た」の異形態であると主張し、「-て」と「-た」は意味論的に同一であるとした。日本語の時制は相対的であるという主張 (Ogihara, 1996, 1999; Soga, 1983) を受け入れるとすると、このことは「-て」接続はそれによって接続される 2 つの句の時間順序を表しているということになる。本稿ではこの分析を採用する。

Nakatani(2003, 2013) によれば、「-て」と「-た」の形態の違いは CP 主要部による統率の有無によって決まる。すなわち、「-て」は「-た」の CP 主要部による統率が無い形なのである。例えば (5) では、TP<sub>1</sub> の主要部は C に統率されていないため「て」になり、TP<sub>2</sub> の主要部は C に統率されているために「た」が現れる。



そして Ogiwara(1996) による日本語の時制に関する議論をイベント基盤に変えて採用し、「-て」接続の形式的意味を次のように定めている。<sup>\*1</sup>

- (6)  $[-た/て] = \lambda P \lambda t \lambda e [T(e) < t \wedge P(e)]$   
 ただし  $P$  はタイプ  $\langle ev, t \rangle$ ,  $R$  はタイプ  $\langle i, \langle ev, t \rangle \rangle$  とする。  
 (Nakatani 2013, ch. 4 (72 b))

「-て」節 ((5) における  $TP_1$ ) 自体は他の句に接続することができない。したがって、「V て V」文の意味を記述するには「-て」節が主節の動詞 ((5) における  $VP_2$ ) に付加するための規則が必要である。そこで、Nakatani(2013) は (7) のような規則を立てることで、「-て」接続の意味を導出している。さらに Nakatani(2003, 2013) は (4) に見られるような「V て V」文の多様な意味、とりわけ Hasegawa(1996) がそれらの源泉であると主張する nonincidentalness は TP(という CP 未満の句) の付加一般の性質であると主張する。実際、(4) のような意味は「て」が含まれていない文でも現れる (4.2 節参照)。

- (7) **TP-VP 付加規則 (Nakatani(2013) 版)**  
 $\gamma$  が  $[_{VP} TP VP]$  である時、  
 $[[\gamma]] = \lambda e_1 \exists e_2 [P(e_1) \wedge R(T(e_1))(e_2)]$   
 が成り立つ。ただし、 $[[VP]] = P^{(ev, t)}$ ,  $[[TP]] = R^{(i, \langle ev, t \rangle)}$  である。  
 (Nakatani 2013, ch. 4 (73))

これらの道具立てを用いると、(1) の意味は (8-13) のように算出される。(13) の最終行では、ジョンが歌うイベントとメアリーが踊るイベントがいずれも起きており、前者のイベントが後者に先行しているという意味が算出されている。

- (8)  $[[ジョン 歌い]] = (\lambda x \lambda e \mathbf{sing}'(e, x))(j) = \lambda e \mathbf{sing}'(e, j)$   
 (9)  $[[TP_1]] = [[ジョンが歌って]]$   
 $= \lambda P \lambda t \lambda e [T(e) < t \wedge P(e)] (\lambda e \mathbf{sing}'(e, j))$   
 $= \lambda t \lambda e [T(e) < t \wedge (\lambda e \mathbf{sing}'(e, j))(e)]$   
 $= \lambda t \lambda e [T(e) < t \wedge \mathbf{sing}'(e, j)]$   
 (10)  $[[VP_2]]$   
 $= [[メアリー 踊り]] = (\lambda x \lambda e \mathbf{dance}'(e, x))(m) = \lambda e \mathbf{dance}'(e, m)$   
 (11)  $[[TP_1 + VP_2]]$   
 $= \lambda e_1 \exists e_2 [\mathbf{dance}'(e_1, m) \wedge [T(e_2) < T(e_1) \wedge \mathbf{sing}'(e_2, j)]]$  (TP-VP 付加規則による)  
 (12)  $[[matrixTP]]$   
 $= \lambda P \lambda t \lambda e [T(e) < t \wedge P(e)] (\lambda e_1 \exists e_2 [\mathbf{dance}'(e_1, m) \wedge [T(e_2) < T(e_1) \wedge \mathbf{sing}'(e_2, j)]])$   
 $= \lambda t \lambda e [T(e) < t \wedge \exists e_2 [\mathbf{dance}'(e, m) \wedge T(e_2) < T(e) \wedge \mathbf{sing}'(e_2, j)]]$   
 (13)  $[[matrixCP]]$   
 $= [[C ジョンが歌って, メアリーが踊った]]$

<sup>\*1</sup> 以下で仮定されている詳細な定義：

1. 基本タイプは  $e$ ,  $ev$ ,  $i$  の 3 つであり、タイプ  $e$  は個体、タイプ  $ev$  はイベント、タイプ  $t$  は時間帯に相当する。
2. 動詞の意味はタイプ  $\langle e, ev \rangle$  の述語である。
3.  $T$  はタイプ  $\langle ev, t \rangle$  の関数で、イベント  $e_1$  がイベント  $e_2$  に先行するならば  $T(e_1) < T(e_2)$  となるように定める。
4. Root  $C$  は  $\lambda R \lambda t \lambda e [T(e) \subseteq t_R \wedge R(t)(e)]$  であるとする。直感的には、 $C$  は時間が定まっていない TP  $R$  を reference time  $t_R$  に固定する役割を果たす。
5. CP の意味はタイプ  $\langle i, \langle ev, t \rangle \rangle$  になる。これが真になるのは、発話時刻  $s^*$  とイベントの自由変項  $e$  を代入し、イベントについて存在量化した論理式が真になる時、またその時に限る。

$$\begin{aligned}
&= \lambda R \lambda t \lambda e [T(e) \subseteq t_R \wedge R(t)(e)] (\lambda t \lambda e [T(e) < t \wedge \exists e_2 [\mathbf{dance}'(e, m) \wedge T(e_2) < T(e) \wedge \mathbf{sing}'(e_2, j)]]]) \\
&= \lambda t \lambda e [T(e) \subseteq t_R \wedge [T(e) < t \wedge \exists e_2 [\mathbf{dance}'(e, m) \wedge T(e_2) < T(e) \wedge \mathbf{sing}'(e_2, j)]]] \\
&= 1 \text{ iff } \exists e \exists e_2 [T(e) \subseteq t_R \wedge [T(e) < s^* \wedge [\mathbf{dance}'(e, m) \wedge T(e_2) < T(e) \wedge \mathbf{sing}'(e_2, j)]]]
\end{aligned}$$

### 3.2. TP-VP 付加規則の修正

ここで、条件文的な「V て V」文 (4g.ii) について (8-13) と同様に計算した結果は、当然 (14) のように連言的になる。しかし、これは (4g.ii) の意味として適切ではない。<sup>\*2</sup> (14) によれば、ジョンは実際に愛を欠いており、生きることができない。しかし、(4g.ii) の自然な解釈は、「ジョンがもしも愛を欠いたならば生きることができない」であって、ジョンは愛を欠いていなければ生きることができるのである。

$$(14) \quad \lambda t \lambda e [T(e) \subseteq t_R \wedge [T(e) \subseteq t \wedge \exists e_2 [\mathbf{cant-live}'(e, j) \wedge T(e_2) < T(e) \wedge \mathbf{lack-love}'(e_2, j)]]]$$

Nakatani(2013) の形式化で「V て V」文が必ず連言的になる理由は TP-VP 付加を連言的に定義しているためである ((11) 参照)。しかし、筆者の理解が正しい限り、(7) の TP-VP 付加規則は当座の (8-13) の計算が成立すること以外に動機付けられていない。したがって、「V て V」文の条件文の意味を連言と同様に算出するために TP-VP 付加規則を修正することが独立の理由によって拒まれることはない。そこで、次のように条件文的にした修正版の規則を提案する。

#### (15) TP-VP 付加規則 条件文版

$\gamma$  が [VP TP VP] である時、

$$[[\gamma]] = \lambda e_1 [\exists e_2 R(T(e_1))(e_2) \rightarrow P(e_1)]$$

が成り立つ。ただし、[[VP]] =  $P^{(ev,t)}$ 、[[TP]] =  $R^{(i,(ev,t))}$  である。

この規則に従うと、(4g.ii) の意味は次のように算出される。

$$(16) \quad \lambda t \lambda e [T(e) \subseteq t_R \wedge [T(e) \subseteq t \wedge [\exists e_2 [\mathbf{lack-love}'(e_2, j) \wedge T(e_2) < T(e)] \rightarrow \mathbf{cant-live}'(e, j)]]]$$

(16) は条件文的であり、「ジョンが愛を欠くならば生きられない」という自然な解釈をそのまま反映している。

無論、(16) を採用することで連言的な「V て V」文も条件文的になってしまう。しかし、連言の意味は条件文と時間順序に関する情報から語用論的に推論することが可能である。まず、conditional perfection (Geis and Zwicky, 1971; von Stechow, 2001) により、(17b) の意味が出る。そして、(18) が成り立つが、否定は有標であるためグライスの様態の格率より、両方とも偽である場合は排除される。かくして (17c) が導出される。<sup>\*3</sup>

$$(17) \quad \text{a. } \lambda t \lambda e [T(e) \subseteq t_R \wedge [T(e) < t \wedge [\exists e_2 [\mathbf{dance}'(e, m) \wedge T(e_2) < T(e)] \rightarrow \mathbf{sing}'(e_2, j)]]]$$

$$\text{b. } \lambda t \lambda e [T(e) \subseteq t_R \wedge [T(e) < t \wedge [\exists e_2 [\mathbf{dance}'(e, m) \wedge T(e_2) < T(e)] \leftrightarrow \mathbf{sing}'(e_2, j)]]]$$

$$\text{c. } \lambda t \lambda e [T(e) \subseteq t_R \wedge [T(e) < t \wedge [\exists e_2 [\mathbf{dance}'(e, m) \wedge T(e_2) < T(e)] \wedge \mathbf{sing}'(e_2, j)]]]$$

$$(18) \quad \phi \leftrightarrow \psi \equiv (\phi \wedge \psi) \vee (\neg \phi \wedge \neg \psi)$$

(19) 様態の格率：

- |                  |           |
|------------------|-----------|
| 1. わかりにくい表現を避けよ。 | 3. 簡潔たれ。  |
| 2. 曖昧さを避けよ。      | 4. 順序づけよ。 |

<sup>\*2</sup> より顕著な意味は条件的だが、「愛を欠いてしまったジョンはもう生きることができない」という言い換えが可能な連言文として解釈することも可能である。(4g.ii) がどちらにも解釈可能であるという点は 4.2 節でも触れる。

<sup>\*3</sup> Hara(2019, 2022) は、現代では条件文の意味でしか用いられない「-えば」の形の接続を持つ文が上代日本語では連言の意味でも用いられていたことについて、動的な条件文の意味から Levinson の I-implicature による推論を通じて時系列や因果関係の意味が導出されることを用いて説明している。条件文から連言の意味を推意するという点で「-て」接続と同様であるため、「-えば」と「-て」接続の統一的説明も可能かもしれない。この点は今後の研究課題とする。

#### 4. 条件的連言と「-て」接続の条件文的意味

前節では、TP 附加の規則を条件文的に捉え直すことによって「V て V」文の条件文的意味を導出した。しかし、英語をふくむ諸言語では連言が条件文的に解釈される条件的連言 (conditional conjunction) の例が多く観察されており、多様なアプローチからの研究が存在する。そのため、「V て V」文の分析も他の条件的連言と同列のものとして行うのが適切であって、わざわざ条件文から連言的な意味が導出されるという逆向きの導出をするのは誤りであるという反論が予想される。ところが、ゼロ連言 (zero conjunction; Watanabe, 1994) と比較することで、「V て V」文はただの条件的連言とは異なる性質を持つことが観察される。本節では、条件的連言について簡単に確認したのち、(15) を支持する証拠として「V て V」文とゼロ連言文の比較を行う。

##### 4.1. 条件的連言

条件的連言とは、表面上は連言的だが実際には条件文的に解釈される文のことである。例えば、(20) は *and* で 2 つの文を繋いでいるため連言文の形式をしているが、その自然な解釈は *and* の前にある節が条件節であるような条件文になっている。

- (20) You drink another can of beer and I'm leaving.  
(≈If you drink another can of beer, I'm leaving.) (Culicover and Jackendoff, 1997)

条件的連言文は英語をはじめ、ドイツ語 (Kaufmann, 2012)、ブラジルポルトガル語 (Rodrigues and Keshet, 2015)、ギリシャ語、パレスチナアラビア語、フランス語、アルバニア語 (von Fintel and Iatridou, 2017) などで観察されている。さらに、理論的な知見からも様々な説明が提案されている。例えば、Culicover and Jackendoff (1997) や Klinedinst and Rothchild (2012) は等位接続詞の左従属 (left subordinate) によって *and* を含む文を条件文として解釈しており、Keshet (2013) は *and* の意味は変えずに情報構造のフォーカスから条件的連言を説明しようとしている。また、Kaufmann (2021) は動的意思論の枠組みで条件的連言を捉えた研究である。

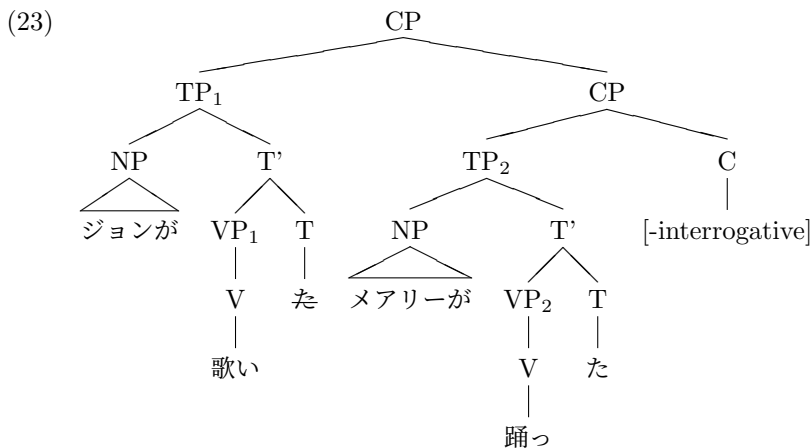
このようにデータの多さと理論的見地の豊富さから、「V て V」文を条件的連言と捉えることが分析の近道に見える。しかし、次の小節で「V て V」文は条件的連言とは本質的に異なるということを見る。

##### 4.2. ゼロ連言と「-て」接続

ゼロ連言とは、(21) のように動詞の連用形を直接接続する形式の文である。「V て V」文では「-て」は動詞の連用形につくため、ゼロ連言は「V て V」文から「て」を除いたものであると言える。(22) は (4) の各文から「て」を除いた文を列挙している。これを見ると、連言的な「V て V」文はゼロ連言文に変えても意味、容認度ともに落ちないが、条件文的な (22h-i) は大きく容認度が落ちるか、または意味が連言的に変わることがわかる。条件文的な意味しか持たない (22h.i) と (22i) は容認度が落ち、条件文的な読みと連言的な読みで曖昧な (22h.ii) は連言的な読みしか持たなくなる。このような現象が起こるのは、ゼロ連言が連言的な意味しか持たないことに起因する。すなわち、(22h.i) と (22i) の容認度の低さは、条件文的な関係でなければ自然でないような 2 つの VP を強引に連言的な関係に置くことから生じ、(22h.ii) はゼロ連言にすることで連言の意味のみが可能になって条件文的な意味が失われるのである。

- (21) ジョンが歌い、メアリーが踊る。
- (22) a. 本を借り、読んだ。 g. ジョンが歌い、メアリーが踊った。  
b. 雨が降り、行けなかった。 h. i. ?? 歩き、30 分くらいかかる。  
c. 昼休みの 30 分を喋り、過ごす。 ii. ?? ジョンは愛を欠き、生きることができない。  
d. 彼は学校を去り、私は学校に留まった。 (ただし連言的な解釈のもとでは容認可能。)  
e. 気象情報を集め、天気図にする。  
f. この部屋は実に暑く、いつも 30 度以上ある。 i. ?? 一昼夜寝ず書き、5 枚もできない。

ゼロ連言の統語構造は (23) のようになっている。ここでは, Nakatani(2013) にならい, TP<sub>1</sub> の主要部は右肢節点繰り上げ (right node raising) されていると仮定する。



この構造が正しいとすれば, 「V て V」文とゼロ連言の違いは統語的にも単なる「て」の有無でしかない。したがって, ゼロ連言には存在しない条件文的解釈が「V て V」文に存在するという事は, 条件文的解釈は「て」の挿入によって生じたということになる。このことが条件的連言との違いである。(24) に例示されるとおり, 条件的連言は明示的な *and* が無くても条件文の意味を持つ。すなわち, 条件文の意味が現れるのは必ずしも *and* の挿入によらないのである。それに対して「V て V」文の条件文の意味は「て」の挿入によるため, 「V て V」文の条件文の意味は条件的連言とは違い, 条件文から連言の意味が導出されるという分析が必要になる。

(24) You call the cops, I break her legs. (Klinedinst and Rothchild, 2015)

ここで, 「て」の挿入によってどのように条件文の意味が現れるかが問題となる。その問題解決のためにゼロ連言の意味の導出から考える。TP<sub>1</sub> は主要部を持っていないため, 意味計算ではタイプ  $\langle ev, t \rangle$  である。そのため, ゼロ連言の意味の算出にはタイプ  $\langle ev, t \rangle$  同士の付加規則が必要になる。VP への VP の付加は, Partee and Rooth(1983) が仮定しているようなタイプシフトを用いて (25) のように定義する。(25) にしたがって (21) の意味を算出すると, (26) のように連言的になる。

(25)  $\gamma$  を  $[\text{VP VP}_1 \text{ VP}_2]$  とすると,  $[\gamma] = \lambda e[P_1(e) \wedge P_2(e)]$ .  
 ただし,  $[\text{VP}_1] = P_1^{(ev,t)}$ ,  $[\text{VP}_2] = P_2^{(ev,t)}$  とする。

(26)  $\lambda t \lambda e [T(e) \subseteq t_R \wedge [T(e) < t \wedge [\text{sing}'(e, j) \wedge \text{dance}'(e, m)]]]$

以上の形式化に従えば, ゼロ連言文と「V て V」文の違いは VP 付加か TP 付加かという点に帰属される。ゼロ連言は VP 同士の接続であり, 連言的な意味しか持ち得ない。ところが, 「V て V」文では付加する「-て」節は TP であり, 主節の VP に TP 付加するため, 条件的な意味を持つ。つまり, 「て」の挿入によって付加するものの範疇が変わるために条件文的な意味が生じるのである。

## 5. 「-と」接続

「-て」接続と似た接続として「-と」接続がある。「-と」も「-て」と同様に TP 主要部であることは (27) の観察から確認される。「-と」接続もまた連言の意味と条件分の意味を両方持つ。(28a) ではトンネルを抜けたことも雪国であることも真であるため連言的であるが, (28b) は「カツオノエボシに刺されたならば死にいたる危険がある」という言い換えが可能な条件文である。「-と」接続の意味論自体は本稿の範囲を超えるためここでは触れないが, 「-と」接続という TP 付加に連言的な意味と条件文的な意味の両方が現れるということは本稿の TP 付加の形式化を支持する証拠である。

- (27) a. ジョンが歌うと、メアリーは踊る。 (28) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。  
 b. \*<sub>[TP ジョンが歌った]</sub>と、メアリーは踊る。 b. カツオノエボシに刺されると死にいたる危険がある。

## 6. 結論と今後の展開

本稿では、「V て V」文に条件文的意味があることに注目し、条件文的意味を導出することができるような TP 付加規則の定義を提案した。提案した TP 付加規則は、Nakatani(2013) が連言的なのに対して条件文的な形式をとっている。この TP 付加規則は 2 つの言語観察によって独立に支持された。一つはゼロ連言との比較である。ゼロ連言は連言の意味しか持たず、条件文的意味は現れない。そのため、「V て V」文の条件文的意味は「て」の挿入によって生じる。「-て」接続とゼロ連言では接続される句の範疇が違うことに着目することで「V て V」文のみに条件文的意味が現れることが説明された。この説明は TP 付加が条件文的でなければ成立しないため、「て」の挿入によって初めて条件文的意味が生じることは本稿の TP 付加規則の定義を支持する。2 つ目の観察は「-と」接続である。「-て」接続と同様に VP への TP 付加をする「-と」接続においても連言と条件文の双方の意味が現れる。このことは、TP 付加によって条件文的意味が現れることを説明している。

今後の展開としては、本稿の「-て」接続の分析に則って (29-30) のような (譲歩的) 条件文の意味を合成的に導出することが挙げられる。特に、(29) のような譲歩的条件文は、(31) のように日本語の unconditional の一つの形式になっている。本稿の提案する「V て V」文の意味は基本的に条件文的である。しかし、「V て V」の条件文の意味にどのような合成をすることで譲歩的条件文や unconditional の意味が導出されるかは明らかではない。この問題は今後の研究課題とする。

- (29) ジョンが歌っても、メアリーは踊り続けた。 (31) 誰が歌っても、メアリーは帰ってしまう。  
 (30) ジョンが歌っては、メアリーが帰ってしまう。

**参考文献** Culicover, Peter W. 1997 “Semantic subordination despite syntactic coordination.” in *Linguistic Inquiry* 28 : 195-218. Geis, Michael, and Zwicky, Arnold. 1971. “On Invited Inferences” in *Linguistic Inquiry* 2. Hara, Y. 2019. ”Diachronic Semantic Shift of Sequential Conjunction: the Causal to Conditional Path.” in *Semantics and Linguistic Theory*. 29. 300. Hara, Y. 2022. “Semantic Shift from Conjunction/Causal to Conditional.” *lingbuzz/005925* Hasegawa, Y. 1996. “The (Nonvacuous) Semantics of TE-Linkage in Japanese” in *Journal of Pragmatics* 25.6, pp. 763-790. Kaufmann, Magdalena. 2012. “Interpreting Imperatives.” Keshet, E. 2013. “Focus on conditional conjunction” in *Journal of Semantics*, 30:211-256. Martin, Samuel E. 1975 “A Reference Grammar of Japanese”. University of Hawai’ i Press. Matsui, A. 2009. “Constructing Concessive Conditionals: In Case of Japanese” in *Proceedings of Sinn Und Bedeutung*, Vol. 13, no. 2, pp. 357-70 Nakatani, K. 2003. “Analyzing -te.” in *Japanese/Korean Linguistics (JKL)* 12, Stanford, CA: CSLI Publications, , pp.277-287. Nakarani, K. 2013. “A study of the V-te-V predicate in Japanese.” Kuroshio Publsihers. Ogihara, T. 1996 “Tense, attitudes, and scope.” Partee, B. and Rooth, M. 1983 “Generalized Conjunction and Type Ambiguity.” in *Formal Semantics: The Essential Readings*. Rodrigues, G. and Keshet, E. 2015. ”Conditional conjunctions in Brazillian Portuguese.” in *Modeling Conditionality* Workshop. von Stechow, Kai. 2001 “Conditional Strengthening”. von Stechow, Kai. and S. Iatridou. 2017. “A modest proposal for the meaning of imperatives.” in *Modality Across Syntactic Categories*, 288-319. Oxford University Press. Watanabe, Y. 1994 “Clause-Chaining, Switch-Reference and Action/Event Continuity in Japanese Discourse: The Case of Te, To and Zero-Conjunction.” in *Studies in Language* 18, pp. 127-203.